



Title	例会特別企画：デザイン史研究と教育2
Author(s)	高安, 啓介
Citation	デザイン理論. 2025, 86, p. 60-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102495
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

例会特別企画

デザイン史研究と教育 2

2025 年 2 月 8 日（土）14:30-16:30

オンライン

司会：高安啓介（大阪大学）

個々のテーマにこそしむ会員どうしの交流をはかりながら、学問の将来について皆で考えてみようという考えから、この機会をもうけた。前回は、講義シラバスの比較をおこなったが、今回は、デザイン史・建築史・ファッション史の入門講義の紹介をとおして、学生たちをデザインの学問に導き入れるにはどうすればいいかについて意見を交わした。

デザイン史	高安啓介（大阪大学）
建築史	千代章一郎（島根大学）
ファッション史	鈴木桜子（杉野服飾大学）

3名の提題者は、共通項目について20分程度の報告をおこなった。①歴史を学ぶ理由は何か②デザインおよび各分野の定義づけ③歴史の始まりと大まかな段階④歴史への新しい視点⑤学生たちに勧める参考文献。ディスカッションでは、これらの共通項目の比較をとおして、分野の違いを超えて、共通の問題点を明らかにしようと試みた。

実技系の教育においては、カリキュラムの必須科目として、歴史入門講義が組み込まれている場合が多く、学生たちに何を教えるかという以前に、学生たちが歴史を学びたいと思うような動機づけをおこなう必要がある。学生たちが自分の気になることについて自分で調査研究するきっかけを提供することが何よりも大事である。

モンドリアンの抽象絵画でも何でも、学生たちが実作において過去の意匠を使おうとするとき、それがどのような文脈において生み出されたのかを知ってほしい。フォントを選択するとき、活字書体のたとえばセリフの形状の細部にまで、意味が染みついていることを認識してほしい。知的なデザインは歴史をふまえているはずである。

歴史はたしかに物語である。歴史はもちろん事実にもとづかなければならないが、何らかの視点がそこに含まれているはずであり、歴史は幾通りにでも語られうる。とはいえ、大学の入門講義では、標準化された通史が語られがちである。学問の入口としてあまり変わった歴史は相応しくないかもしれない。

デザインの通史には、お決まりのパターンがある。1851年のロンドン万国博覧会において、ものの生産に先立ってもののかたちを決めるデザインの仕事がかさね意識され、19世紀にモリスのようなデザイ

ナーは美しい装飾を生み出そうとしたが、20世紀には単純な幾何学をもちいた近代デザインが登場する、といったストーリーである。

建築史は、日本建築史・西洋建築史・近代建築史のように分割され、西洋と日本という二元論が前提とされがちである。各々の文化の建築史を相対化する視点がはじめから欠けている。世界を分割し、西洋と日本だけをつまみ上げ、古代・中世・近世・近代などとさらに分割する。そして現代建築はその延長、というわけである。

ファッション史については、パリ・モードの歴史として語られがちで、デザイナー列伝とともに流行の変遷を追うことに力点が置かれ、女性服がおのずと対象となってきた。これよりニアに歴史をとらえる一つの方法ではあるが、それゆえに、他の造形分野との関係が見えにくくなるという負の側面もあった。

研究者ならば、歴史の通説を見直したり、新しい歴史への見通しをしめそうとしたりするだろう。ただしそれは、多くの人が通説を知っているかぎり意味をなす。入門講義において、通説をしっかりと教える必要はあるが、歴史はつねに他でもありうる可能性もしめさなければならない。現代らしい視点を取り入れる必要がある。

デザインの歴史がとかく西洋中心になりがちだったのは、西洋諸国がいち早く産業化を進めてデザインへの意識を高めたことが背景にあるにせよ、西洋中心史観はだんだんと見直されつつある。他方において、日本国内に目を転じると、海外への関心がうすれて内向きの傾向が著しくなっている。日本だけではないアジアにも目を向けたい。

研究者の減少は、学会員の減少につながる。初学者への親切的なガイドの必要を感じている。そこで、学会の事業として『デザイン研究入門』を出版してはどうかと提案している。自分の研究に没頭するだけでなく、学問の大局をとらえて行動しなければ、自分の研究の理解者をうしなうことになるだろう。

高安啓介（大阪大学）